日本植民地期における韓国の日本人移住漁村の形成に関する研究

—巨文島・巨文港を対象として

FORMATION OF JAPANESE MIGRANT FISHING VILLAGE COLONY IN KOREA

—In the case of Geomun-do island

朴 重 信*, 布野修司**

Chungshin PARK and Shuji FUNO

This paper aims to clarify the formation process of migrant fishing village of Japanese during their colonization of Korea. Research reveals the background and formation of Japanese migratory process in order to illustrate their fishing village forms and spatial pattern by raising Geomun-do Island as a case study. In this research, we clarify formation process and spatial pattern of its village. Clarifying of functional development process of the village is also another objective of this research. It appears that coastline and its roads, wells and location of progenitor's settlement plays a vital role in form and spatial structure of the village. Road system of the village was constituted from roads running parallel with coastline and small alleys stretching perpendicularly to them providing trapezoid shape of lands. As places for housework or community gathering places, two wells adjacent to the progenitor's premises play a significant part as cores of housing development of the village. Though this seashore village is tiny in scale, fishing, trade and pastime activities provide a multi-facet function to the village as other modern cities.

Keywords: Japanese migrant fishing village, Government supported fishing village, Privately initiated fishing village, Formation, Spatial form
日本人移住漁村、補助移住漁村、自由移住漁村、形成過程、集落空間構造

1. はじめに

1-1 研究の目的と意義

本研究は、1800年代末から韓国の各地に日本人が移住し、住み着いた日本人移住漁村を対象として、移住の背景とその形成過程を考察した上で、日本人移住漁村の空間構造とその変容過程を分析し、集落形態及び空間構成を明らかにすることを目的とする。本稿では、日本人移住漁村の中で日本人の居住世帯比率が最も高い漁村であった巨文島の巨文港を取り上げ、その形成過程と集落の空間構成、都市的機能形成過程を解明する。

1800年代末から始まった日本人の韓国漁村への移住に関する文献は、主に朝鮮総督府の調査資料や水産局の資料に基づいて作成されたものが多い。その中で、主要なものは吉田敬市と孫禎睦の研究がある。吉田敬市の「朝鮮水産開発史」^{*1}は、日本人が移住してつくった漁村を「補助移住漁村」と「自由移住漁村」に分けて明らかにしている。朝鮮近海の自然地理、港湾の状況、水産技術水準などを詳しく論じている。一方、孫禎睦は「日帝強占期都市化過程研究」^{*2}で、漁港都市の形成の過程と日本漁民の通漁と移住過程について明らかにしている。この2つの著作は本研究の前提になっている。

また、巨文島に関する文献は、他の島と比べると比較的多い。それは地政学的に重要な意味があり、外国勢力の侵略を受けやすい島であったからである。島の歴史については時期別に様々な記録や歴史書^{*3}が残されているが、近代史を概括したものとして敦永甫の「巨文島風雲史」^{*4}があり、当時の巨文島の地政学的な位置づけを理解する上で重要である。日本人による巨文島の開拓に関する研究としては、文化人類学分野で崔吉成^{*5}や中村均^{*6}の著書がある。崔は民俗文化の側面から日韓の文化変容に焦点を当て、中村は国際交流史の観点から論じている。他に英国の巨文島

占拠事件を扱った様々な研究がある。^{*7}しかし、本研究の対象とする日本人移住漁村である巨文島の空間構成や建築的特性について論じているものは皆無である。

日本人移住漁村は、日本人の移住により開拓され、その漁村の大半はその後韓国の主要漁港になったという経緯がある。また、巨文島は様々な葛藤や衝突を引き起こした韓国各地の都市の場合と異なり、無人島を近代的な漁村として建設したという点に特徴がある。^{*8}現在でも、当時の建物が数多く残っており、道路の幅や町並みの規模などもほとんど当時の状態のままである。その故、巨文島の形成過程を考察することにより、韓国各地の日本人移住漁村の空間構成原理、集落形態を解明する手がかりを得ることができる。

1-2 調査概要

本研究を行うにあたり、二度にわたり巨文島へ赴き、文献・地図の資料を収集するとともに現地調査を行った。第1次調査は、2000年8月21～31日にかけて行った。資料収集を行うとともに、麗水市製作の地籍図の複写(1/1,200)と韓国国土地理院製作の航測図(1/3,000)を下敷きとして、島の全地域の施設分布、建築類型(建築年度、用途、構造、階数)を主とする悉皆調査を行い、施設分布図を作成した。また、道幅の測定、井戸の位置などの個別調査を行った。第2次調査は2002年8月19～23日にかけて、資料収集を行うとともに集落の変遷過程に関するヒアリング調査を行った。

【図1】巨文島の位置図

* 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程・工修

** 京都大学大学院工学研究科 助教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture and Environmental Design, Kyoto University, M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Environmental Design, Kyoto University, Dr. Eng.

2. 日本人移住漁村の形成と発展

2-1 日本漁民の朝鮮通漁と保護奨励策

日本人の海外移住は1885年(明治18年)頃から始まる。明治10年代の全国的な経済不況と自然災害などが原因で、農業及び漁業移民が主にハワイ、北アメリカ、ブラジルなどに渡った。朝鮮半島への漁業移民の場合も同様な背景があり、漁村の不況と日本政府の後押しがあった。長く鎖国政策を行っていた朝鮮政府は「日韓修好条規」(1876年)により、日本に対して開国し、釜山を開港場として日本人の居住と通商を認めた。これは、一般物資の通商のみを認可したもので、通漁の自由を認めたわけではなかった。日本漁民の朝鮮沿海の通漁が正式に認可されたのは1883年7月の「在朝鮮国日本人民通商章程」が締結されてからである。1889年12月には「日朝両国通漁章程」が締結され、日本漁民の韓国近海の通漁がより円滑になった。続いて、1890年(明治23年)に「日本朝鮮両国通漁規則」が公布され、日本漁船が朝鮮近海に出漁するようになる。1897年(明治30年)には「遠洋漁業奨励補助法」を發布し、1898年(明治31年)に農商務省水産局長を韓国へ派遣調査させ、その結果府県毎に「韓海

【図2】日本人移住漁村の分布
(吉田敬市、1954)

通漁組合」(1900年)が組織されることになった。さらに「朝鮮海通漁組合連合会」(1902年)が設置され、その本部を釜山に置き、朝鮮海水産業開発の助長機関とした。以上のような日本政府の保護奨励策は各府県においても継承され、各地の水産試験場や漁業組合は韓国の南海(ナンヘ)進出のため、様々な方策が採られた。

2-2 補助移住漁村と自由移住漁村

1904年2月、日本政府がロシアとの国交断絶を通告し、「日韓議定書」を締結する。続いて、1908年10月には、「日韓漁業協定」を結び、11月には「韓国通漁法」と「漁業法施行細則」が制定・發布された。この3つは、日本漁民の韓半島の定着と通漁がより有利に進められるように支援するものであり、韓国内に「補助移住漁村」を形成させる制度的装置であった。「補助移住漁村」が本格化されたのは「日韓漁業協定」が締結された1908年前後である。「補助移住漁村」を建設した背景には次のような点がある。

- 1)これまでの日本漁村の韓海通漁は往復に多くの日数が必要であり、遭難などの危険があったこと
- 2)日本国内の人口増加、資本主義的経済発展による植民的移住熱が高まったこと
- 3)日本の大陸政策の立場で、朝鮮の移住漁村の建設は必要不可欠であったこと
- 4)1908年に「漁業法」を發布し、この漁業法による漁業権の免許・許可は韓国内居住者に限られたこと

一方、「自由移住漁村」というのは、日本人が任意で韓国各地に移住して住み着いた漁村である。こうした「自由移住漁村」は、計画性を持ってい

【表1】 日本植民地期の著名漁港(1929年末現在、北朝鮮を除いて)

位置	道 郡 面 洞 理	移住年度	種別	別称	主要内容	主要産物	日本人		韓国人		計	
							戸	人口	戸	人口	戸	人口
西 南	全北沃溝郡米面京場里	-	-	-	-	-	23	109	445	3,067	468	3,176
	全南済州郡済州面三徒里	1879(明12)	自→補	-	潜水業者の根拠地	タイ、イカ、イワシ	35	119	530	2,586	568	2,713
	右面西帰浦	1879(明12)	自→補	-	同上	同上	40	167	303	1,438	350	1,630
	大静面下墓里	1879(明12)	自→補	古浦	同上	同上	9	33	492	2,022	503	2,060
	新左面咸德里	1879(明12)	自→補	城山浦	同上	同上	-	-	648	2,660	648	2,660
	莞島郡崇島面郡内里	1893(明26)	自	所安島	同上	-	82	380	294	1,722	385	2,133
	高興郡道陽面鳳岩里	-	-	-	-	-	14	57	452	2,644	467	2,715
	蓬萊面外蘇老島	1894(明27)	自→補	なし	エビ製造業の中心地	海老、	83	380	215	1,249	298	1,630
	麗水郡麗水面東町	1912(明45)	自→補	広島村、愛知村	ハモの中心地	鱧	281	1,139	729	4,919	1,014	6,072
	突山面郡内里	-	-	-	-	-	9	27	330	2,068	339	2,095
	三山面巨文里	1905(明38)	自→補	なし	サバ巾着の最大根拠地	サバ	110	376	72	224	184	605
	慶南南海郡三東面弥助理	1909(明42)	自→補	佐賀村	サバからイワシに転向	サバ、イワシ	46	168	318	1,681	367	1,854
	泗川郡三千浦面仙亀理	1911(明44)	補	愛媛村、山口村	消滅	遠洋漁業	27	111	241	1,328	269	1,443
	固城郡東海面壯佐里	1912(明45)	補	燧燧津	サバ経営	サバ	32	164	212	1,225	244	1,389
	統営郡統営面吉野町	1900(明33)	自→補	島根村、長崎村	南鮮屈指の商業・水産都市	イワシ網漁業	296	1,315	331	2,151	628	3,472
	欲知島東港洞	1899(明32)	自→補	山口村	サバ漁業の根拠地	イワシ、サバ	69	413	675	4,374	744	4,787
	巨濟郡二運面長承浦	1904(明37)	自→補	入佐村	サバ巾着の最大根拠地	鯖	162	675	219	1,451	386	2,138
	沙等面倉湖里	1910(明43)	自→補	城浦	イワシ網漁業	イワシ、サケ	2	9	362	2,212	364	2,221
	昌原郡鎮海面慶和洞	1912(明45)	補	鎮海漁港	消滅	遠洋漁業	95	428	986	5,335	1,089	5,793
	東萊郡沙下面多大浦	1906(明39)	自→補	なし	消滅	タイ	62	234	802	4,601	864	4,835
東	慶南蔚山郡東面方魚津	1903(明36)	自→補	福井村、香川村	サバ漁業の最大根拠地	サバ、鱈、	349	1,456	431	2,257	783	3,725
	慶北慶州郡陽北面甘浦里	1907(明40)	自→補	福井村	サバ漁業の根拠地	サバ、イワシ	196	742	518	2,130	719	2,885
	迎日郡滄州面九龍浦	1910(明43)	自	なし	漁業兼運搬業者の根拠地	サバ	192	815	342	1,836	543	2,686
	浦項面浦項洞	1903(明36)	自→補	なし	物資交易の市場、缶詰	イワシ	436	1,838	1,090	5,071	1,539	6,968
	益徳郡益徳面江口理	1910(明43)	自	なし	河港、密漁者の根拠地	サワラ	27	185	189	1,064	219	1,262
	ウルン島南面道洞	-	-	-	-	-	120	408	186	1,293	309	1,711
	江原三陟郡三陟面汀下里	-	-	-	-	-	30	116	104	1,062	134	1,178
	遠徳面臨院里	-	-	-	-	-	15	106	207	1,223	222	1,329
	江陵郡新里面注文津	1908(明41)	自	なし	潜水漁業の根拠地	イワシ	39	232	481	3,584	522	3,845
	高城郡新北面長箭里	1908(明41)	自	なし	江原道最大の根拠地	タラ、サバ、明太	49	205	275	1,400	334	1,620
	通川郡順嶺面下庫底里	-	-	-	-	-	28	122	280	1,868	313	2,104

※朝鮮総督府調査資料第38集「朝鮮の聚落」(前編)、孫植陸の「日帝強占期都市化過程研究」、吉田敬市の「朝鮮水産開発史」を基に作成した。
計には韓国人と日本人以外に中国人などの数も含まれている。

た「補助移住漁村」とはその成立動機、機構、そして発展過程などがまったく異なる。そして、「補助移住漁村」の移住民の大半が漁民であったのに対して「自由移住漁村」では、漁民と元運搬業者や一般商人が漁港に定着し、その中は漁業に転業した人もあった。

吉田敬市は「自由移住漁村」を次のように分類している。^{*9}

1)通業者が任意に移住して定着した漁村—大部分の漁村

2)制限付き許可移住漁村—鎮南浦

3)補助・自由の両移民混在漁村

①最初は補助移住漁村であったが、自由移住漁村に変わった漁村
—蔚珍郡竹辺

②最初は自由移住漁村であったが、補助移住漁村に変わった漁村
—郡山、統営、巨文島

③元は②であったが、再び自由移住漁村に変わった漁村
—方魚津、巨濟島一運面

4)水産物の製造にため立地した漁村—済州島、黒山島、外羅老島

5)個人経営の移住漁村—蔚山郡西生面新岩

以上のような、日本の漁民や水産業者の自由移住定着は、1870年代末の釜山の影島を皮切りに、済州島・元山・仁川・羅老島・郡山・大黒山島・木浦・鎮南浦・馬山・統営につながった。東海(日本海)には、方魚津・浦項・甘浦・九龍浦などは1900年代に入ってから移住定着が行われた。東海の北の方には、1910年代に入ってから定着が行われたが、これは海岸線の屈曲が少ないため、港湾の建設がしにくいからであった[図2]。

2-3 主要漁港への発展

韓国の漁港が本格的に形成・発達したのは、日本植民地期の1920年代以後からで、その背景には日本人の漁民の韓国への移住があった。日本漁民は韓半島の全沿海に散在して優秀な漁具・漁法と近代的漁業経営を通じて漁場を独占するようになる。

しかし、1910年代までは漁港としてその本質的な機能を果たしている漁港集落が極めて少なかった。1910年の総督府統計年報の「主要市街地の現住戸口表」によると、純粋な意味での市街地は、麗水、法聖浦、統営、方魚津、長生浦、長承浦などの9カ所だけであった。1910年代まで発展できなかったのは日本人と韓国人とも定着者が少なかったことがその原因であったが、それ以外にも次のような理由があった。

その一つは、漁具・漁船の未発達による水産業の零細性であった。当時の日韓の水産関係史によると漁船の場合、「1907年代末現在、朝鮮における漁船の数は朝鮮型9,070隻、日本型3,015隻である。しかし、1920年代に入ってから漁船改良を行った結果、朝鮮型は1.5倍、日本型は4倍に増加した。」この資料で10年間の漁船の普及事情がわかる。二つは、港湾施設である。韓国の各港湾に防波堤、停泊地のように近代的な港湾施設が築造されたのは自由移住漁村がつくられた以降の1912年頃である。^{*10}

以降、1910年代の後半からは統営を中心に、麗水、長承浦、三千浦、方魚津、甘浦、九龍浦、注文津、長箭、新浦の漁港が有名になり、1930年代の前後には[表1]に示したように数多くの主要漁港が形成された。

3. 巨文島の日本人移住漁村

3-1 巨文島の地理的環境と歴史的背景

巨文島は韓半島の最南端に位置し、東島、西島、古島の3つの有人島と50余りの大小の無人島で構成されている。済州島(ジェジュド)を除けば韓国の本土から最も離れた島で、昔から中国、韓国、日本を繋ぐ海上交通の要衝である。研究対象の古島(行政区域名:全羅南道麗水郡三山面巨文

里)は、西島と東島に挟まれ、周辺の海の水深が深く安全な天然の港湾となっている。島の面積は1.11km²(33万坪)、人口は776人(260戸、2000年統計)である。気候は結氷がほとんどない温暖な海洋性気候である。

1)海上の道と巨文島

巨文島について最初に議論できるのは、日本から外国へ行く出航のことを歌った7〜8世紀の「万葉集」である。^{*11}当時の海外出航は、主に九州から新羅や唐へ派遣された外交使節であり、6世紀から3世紀間にわたって往来し日本の政治、制度、文化に大きな影響を与えた。このころの外交使節の海上交通路には4つのコース^{*12}があった。これらのうち2つの航路は巨文島に立ち寄るか、付近を航海するものである。また、台風の避難港としても使われており、当時の巨文島は海上航路の要衝地であった。

2) 19世紀の砲艦外交とロシア艦隊の来航

英国は、1840年から42年にかけて中国との間にアヘン戦争を起こしたため、対日政策にかかる余裕がなかった。一方、米国は東洋航路の中継基地として日本に開港を迫るため、4隻の軍艦を派遣した。ペリーPerry(1794〜1858)提督の東インド艦隊が1853年6月、浦賀へ来航して開港を要求し、翌年3月「日米和親条約」を締結する。これに驚いたロシア政府は、プチャーチンPutyatin(1803〜1883)中将を遣日大使に任命し艦隊を派遣する。1852年10月、バルト海のクロンシュタット港を出港し、1853年7月長崎に入港した。同年8月に国書を伝達して開港を迫り、翌年11月に「日露和親条約」を結ぶ。この対日開港交渉中、ロシアのプチャーチン艦隊は1954年4月4日から19日間巨文島に寄港した。^{*13}これが所謂「ロシア艦隊巨文島侵入事件」である。巨文島においてプチャーチンの巨文島来航の歴史的意味は、①韓・露関係史上初めてロシア人が訪れ、開港を要求したこと、②巨文島が戦略的集結地として使われたことである。

3)英国の巨文島占拠事件

19世紀、中国とのアヘン戦争で勝利した英国は、ロシアの南下政策を牽制するため、重要な軍事要衝地として巨文島を占領することを決めた。そして1885年(明治18年)4月、W.ドーウェルDowell中将が率いる英国海軍が巨文島を不法占拠し、英国旗を揚げたのである。これは巨文島史上2度目の外国軍艦による不法寄港であり、初めての強制占拠であった。占拠後、この島を「Observatory Island」と命名し、要塞化するために古島に観測所や砲台を設置し、宿所、食堂、医療施設などを建設した。しかし、この不法占領を巡って国際社会から「第2の香港」と非難される。朝鮮から強く抗議され、またロシア、清、日本との国際問題となるのを避けるため、英国海軍は1887年3月に約23ヶ月間占領した巨文島から撤退した。この事件によって朝鮮の社会や人々の実情は広く西欧社会に知られた。^{*14}

3-2 島の開拓とパイオニア

明治維新によって鎖国から解き放された日本国内の漁業は生産の飽和点を打ち破るため海外へ急激に進出し、とりわけ西南日本の漁業者たちの朝鮮近海への出漁が、1876年(明治9年)の日韓修好条規(江華条約)批准とともに急増した。こうした背景のもとで無人島であった古島(ゴド、巨文里)に1905年、最初に移住して住み着いたパイオニアは木村忠太郎(漁師)と小山光正(郵政技師)である。

1)漁師 木村忠太郎

1905年(明治38年)、山口県豊浦郡の湯玉浦という漁村では家屋170軒が完全焼失する大火事が起き、その漁村に住んでいた木村忠太郎は家屋や家財などを一切失ってしまう。木村は再起を賭けて、それまでしばしば付近に出漁して知識のあった古島への移住を決意し、妻リムと三男を連れて故郷を離れる。1905年(明治38年)4月、巨文島に上陸して、船溜まりとなった

入り江に面する平地に草葺きの小屋を建てた。

2) 郵政技士 小山光正

小山光正は、鳥取県出身の土族と伝えられ、1904年(明治37年)巨文島の戦略的重要性を認識した日本政府の命を受け、日露戦争時代に巨文島の西島に敷設された海底電線の維持管理を任務とする郵政技師として派遣された。1906年(明治38年)には、巨文島郵便所の許可を得て海底電線を巨文島(古島)へ敷設し、自ら数年間所長を勤めた。

3-3 近代的漁港としての発展とその過程^{*15}

巨文島は、当初は自由移民漁村として出発したものの、前述したように日本の政府からの一連の措置にしたがって漸次、漁業基盤を確立していった。特に、1923年4月には「指定港」になり、文化的・行政的中心である麗水市に劣らぬ盛況ぶりを見せるほど発展したのである[図5]。

1) 明治末期(1905年ごろ)・3戸7人～9人

最初に移住した木村忠太郎の住居、倉庫、作業所、小山光正と大野栄太郎の戸建て住宅が建てられた。また、出漁の安全と大漁を祈るため、金比羅宮の小祠が南側の低い丘に造られた。

2) 大正初期～大正末期(1910年代)

-15戸47人

この時期には主に住宅が建てられ、既に住み始めた場所周辺と井戸がある所を中心に海岸線に沿って開発された。また、山の丘へ通じる路地は海岸線に直行する形で形成され始め、海岸道路とともに村の道路体系の基盤となった。

3) 大正末期～昭和初期

(1920年代)・98戸360人

南側の磯の部分ほとんど埋め立てられ、海岸道路が形成される。この海岸沿いに住宅、店舗、旅館などが建て込み、町並みがほぼ完成した。役所、警察署、郵便所などが建てられ、魚市場や漁業関連施設(造船所、鉄工所、製氷所等)、宗教施設も新たにつくられた。

4) 昭和初期～昭和15年頃

(1930年代～40年代初)・99戸347人

道路や漁港施設が整備され、三日月形の海岸道路に沿って町並みが完成した。大きな変化は本格的な漁港として防波堤が作られ、南方に海底電線が敷設されたことである。また、教育・医療施設と遊興施設(風呂屋、遊廊、料亭、喫茶店等)を中心に様々な施設が増えた。

【図4】現在の巨文港の施設分布

4. 空間構造の特性

4-1 施設分布

巨文港の施設分布は住居、商業施設、公共施設、宗教施設、工業施設の5つに大別される[図4]。施設分布に基づいて建物の用途に着目してみると、巨文港の空間構造は以下のような特徴を持つ。

1) 商業施設

商業施設は主に三日月型の海岸道路に並行して並び、その大部分が2階に住居を持つ店舗併用住宅である。その機能としては、スーパー・マーケット、飲食店、雑貨屋(主に、釣り道具や餌を扱っている)、カラオケ、宿泊施設、喫茶店、銭湯などがあり、その中で飲食店、宿泊施設、喫茶店が商業施設の約7割(商業施設の103戸の内、71戸)を占めている。

2) 住居

住居は海岸道路沿いの店舗併用住宅以外、主に漁港の北端部に密集しており、他には街区内部に点在する程度である。その特徴は、漁港の北端部の住居地を除けば、街区内部の住居地はほとんど島の地形に対応して階段式に構成されていることである。また、住居の大半は1945年以後、部分的に増築・改造されているが、全体的な形はあまり変わっていない。

3) 公共施設

主要な公共施設としては、面^{*16}事務所(役所)、警察署、郵便局、小学校、金融機関(銀行、相互金庫など)、消防署、医療施設、公民館、船着場などがある。金融機関と船着場を除けば、ほとんど漁港の南側に集中している。特に、公民館は新しい面事務所が1959年に建てられて移転するまで面事務所として使われていた。機能は変化したものの、その建築様式は現在も当時のままである。また、郵便局の場合はパイオニアである小山光正が誘致した時の位置から離れ、面事務所の入口の隣に位置している。

こうした公共施設が漁港の南側に集中してつくられた背景には、公務員出身である小山光正が1917年に設立された「巨文島漁業共同組合」の組合長をつとめ、行政の集中化を求め、郵便所の周辺に役所、警察署、消防署などの公共施設の敷地を決めるのに大きい影響力を持っていたことがある。

【図3】集落の形成と発展過程

4)宗教施設

宗教施設としては、キリスト教、仏教のための施設がある。具体的には入江東側の敷地の奥にキリスト教会と寺がそれぞれ一つずつ位置する。1920年代の地図からみると、寺の場合、南東の方に二つの寺(浄土真宗と大師堂)が存在していたが、現在は別の場所に新たに建造されたことが分かる。キリスト教会は1953年に建てられた。

一方、現存しないが、入り江南端の小高い丘の上に三島神社が造られたという事実がある。開拓当時には金比羅宮の小祠であったが、これが後「三島神社」あるいは「三島神祠」に発展し、1940年には「紀元二千六百年記念事業」^{*17}の一環として大改築・造営された。現在には、その敷地内には小祠の跡と築港記念碑だけが残っており、鳥居は切断されて船の舳網を繋ぎ止める杭となった。

5)工業施設

漁港の南西端部には工業施設が密集している。その種類は、鉄工所、製氷所、缶詰工場、発電所、倉庫など、主に漁業関連の工業施設である。こうした工業施設の密集の背景には「指定港指定制度」^{*18}があった。1924年に「指定港」としての昇格され、日本政府から支援を受けることになり、それまで整備できなかった南側の磯の部分の埋立て、その敷地に建てられたのである。特に、製氷所は公共性が強い施設であって、港湾施設の一部として建てられたという特徴がある。

4-2 街区構成と街路体系

現在、漁港の街区構成及び街路体系は日本植民地時代とほぼ同様である。街路体系の軸になる海岸道路(平均幅員4.5メートル)は、三日月型の海岸線(総延長1

【図5】 街路網

キロ弱)に並行して、南北両端を繋いでいる。この海岸道路沿いに2階～3階建ての町並みが形成され、ここでは毎年2回金比羅祭り^{*19}が催された。また、この海岸道路とそれに直行して街区内部や丘へ通じる小路(幅員1.8～3m)が敷設され、基本的な街区を構成している。北端部と南端部の街区内部には多数の路地があるが、東側の街区は丘へ通じる地形のため、階段の路地が多い【図5】。さらに、街区内部は小路に沿って敷地割りされて曲線である海岸道路とそれに直行する小路により、街区内部の敷地は基本的に台形になっている【図6】。また、海岸道路に面する敷地の形は幅より奥の方が長い短冊型が大部分で、その幅員の大半は4.5～6メートルである。現在は2つあるいは3つの敷地が統合されつつあるが、その規模はそのまま維持されている。

【図6】 街区構成

4-3 井戸と街区コミュニティ

井戸は島とい

う地理的制約によって開拓初期から1930年代にかけて住宅地の形成過程に重要な要素として作用していた。1940年に入り、島の人口が急増したため、韓国

【図7】 井戸の位置

の本土や水場から伝馬船^{*20}で飲料水を運んで充足していた。1930年代までに掘られた井戸の数は全部で7つで、その内公共用の井戸は5つ、私用が2つであった。最初に掘られた井戸は2つで、その位置は木村と小山の定住地の近くにあった。やがてこの2つの定住地が集落の核となり、1910年から20年にかけて、多数の人々の移住により、3つの井戸が順に掘られ、水は手やポンプで汲み上げられた。それらの井戸を中心に人々が住み着き、井戸は家事の作業場、そして又、コミュニティ場として役割を果たした。私用の井戸は1940年初に伝馬船により給水事情がよくなった際に開発され、それぞれ遊廓と料亭の庭園用水に使われた【図7】。^{*21}

4-4 都市的機能の形成

巨文港は開拓初期から1945年に至るまで近代的な港町として発展し続ける。韓国の他の著名漁港に比較して、規模(人口、面積など)が極めて小さい漁村であったが、その機能分布からみると都市のような漁業・遊興・商業の一大センターであった。したがって、3章の形成の背景及び形成過程を踏まえて、4章で施設分布、街区構成と街路体系、更に井戸と街区コミュニティを総合的に考察した結果、以下のように3段階の都市的機能形成過程が説明できる【図8】。

1)第1段階(1905年～1910年代)

①住居・商業施設群(北側～東側)

—木村の定住地を中心として

②公共・工業施設群

【図8】 都市的機能形成の過程

(南側～西側)―小山の定住地を中心として

2)第2段階(1920年代)

- ①住居施設群(北側)―住居施設の密集と路地の形成
- ②店舗施設群(東側)―海岸道路沿いに商店が建て込む
- ③公共施設群(南側)―郵便局、役所、警察署等の施設
- ④工業施設群(西側)―磯の部分が埋め立てられ、漁業関連の工業施設(造船所、鉄工所、製氷所、缶詰工場、発電所、倉庫など)が建設

3)第3段階(1930年～1940年代)

- ①住居施設群(北側)―住宅地と路地の拡大
- ②店舗施設群(東側)―住居機能を店舗併用住宅への転用
- ③遊興施設群(南東側)―風呂屋、料亭、遊廊、喫茶店、芝居小屋等の遊興施設増加
- ④公共施設群(南側)―小学校、宗教施設の設置
- ⑤工業施設群(西側)―漁港施設の整備

5.まとめ

以上、その形成過程に基づき、日本人移住漁村としての巨文島の空間構造の特徴は次のように要約できる。

- 1) 集落空間の主要要素として、海岸線及び道路、井戸、パイオニアの定住地の3つがあげられる。
- 2) 集落の街路は、三日月型の海岸線に沿う海岸道路とそれに直行する小路で形成された。また、街区は小路で敷地割りされ、街区の形態は曲線である海岸道路とそれに直行する小路により、敷地の形態は台形である。
- 3) 井戸は島という地理的制約によって開拓初期から住宅地の形成過程に重要な要素として作用していた。井戸は7つあり、その中で特に2人のパイオニアの定住地周辺に掘られた2つの共同井戸は住宅地形成・発展過程の核となった。その井戸周辺に人々が住み着き、井戸は作業場、そしてコミュニティー場としての役割を果たした。
- 4) 巨文港は、人口、面積など規模の小さい漁村ではあるが、漁業・遊興・商業等の施設を備えた都市的機能を有する集落である。

変容過程に関する住居と建造物の実測調査やヒアリング調査に基づいた研究成果は別稿で報告する予定である。また、他の日本人移住漁村との比較研究を進めたい。

注

- *1 吉田敬市、朝鮮水産発達史、朝水会、1954
- *2 孫禎睦、日帝強占期都市化過程研究、一誌社(韓国)、1996
- *3 巨文島についての記録は、9世紀(836年)の滋覚大師円仁の「入唐求法巡礼行記」、15世紀の「世宗実録」、16世紀の「新增東国輿地勝覧」などの様々な歴史書に残られている。
- *4 敦永甫、巨文島風雲史、三和文化社(韓国)、1986
- *5 崔吉成、日本植民地と文化変容―韓国・巨文島、御茶の水書房、1994
- *6 中村均、韓国巨文島につばん村―海に浮かぶ共生の風景、中公新書、1994
- *7 主に19世紀の東アジアの情勢に関する研究で、朴準用の「外交史的にみた韓末政局と巨文島事件(1967)」、崔文衡の「列強の東アジア政策(1979)」と「ロシアの太平洋進出企図と英国の対応策(1981)」、李用熙の「巨文島占領外交綜攷(1964)」、元裕漢の「巨文島事件(1969)」、田保橋潔の「近代日鮮関係の研究(1940)」、Dallton, D.J.の「The Rise of Russia TH.Asia, New Haven, Yale University Press(1949)」の等がある。
- *8 日本人移住漁村の集落空間構成と異なる韓国独自の漁村の特徴をまとめてみると、①海岸道路沿いに連続的に町並みが形成されていないこと、②階建てがほぼ見られないこと、③路地の形が直線ではないこと等が挙げられる。

*9 吉田敬市、前掲書、p.267～271

*10 孫禎睦、前掲書、p.462～473

*11 万葉集の「巻第十五」の内容は、「天平八年丙子夏六月、新羅の国に遣ひ使はさる時、使人等、各別れを悲しみ贈り答へ、また海路にて情を憫み思ひを陳べてよめる歌」であり、当時の日本から新羅までの海路に関する内容は、3578～3582節に当る(鹿持雅澄、万葉集古義、国書刊行会、1912-1914)。これに関して中村は「当時、新羅まで行く遣随使の出発地は武庫の浦(現在の神戸)または難波の三津浦(現在の大阪、三津寺町)が多く、瀬戸内海を横切り、北九州に出て、荒津の港から一気に玄海灘へ入るコースを取った。九州から新羅に行くのに朝鮮半島の南の海に浮かぶ孤島の巨文島にわざわざ立ち寄る必要はない。しかし、航海に何らかの支障があれば、当然、緊急避難したことは考えられる。」と記述している(中村均、前掲書、p.3～6)。

*12 次の4つである。

- ①北路(筑紫―対馬―巨文島―朝鮮半島の南西海岸を北上―山東半島)
- ②海道航路(筑紫―巨文島―朝鮮半島の南西海岸―揚州)
- ③南路(筑紫―平戸―五島列島―東シナ海―長江)
- ④南島路(筑紫―種子馬・沖縄本島―東シナ海―長江)

*13 崔吉成、前掲書、p. 45～52

*14 崔吉成、前掲書、p. 52～55

*15 「集落の発展とその過程」の図面は、崔吉成と中村均の著書の中の図面を下敷きにして、現在の地籍図(1/1, 200)、航測図(1/3, 000)、建築物管理台帳の内容などを合わせて、筆者が再作成したものである。

*16 韓国における行政区画の単位で、日本の「村」に当る。

*17 「紀元二千六百年記念事業」(1940年)は、『日本書紀』の記述に基づいた紀元節として神武天皇の即位から2600年目を数えた年を記念して行われた記念事業である。こうした記念事業及び行事は朝鮮・台湾・樺太・関東州・南洋群島といった日本植民地においても大々的に行われ、満洲国皇帝の訪日もあわせて行なわれた。

*18 「指定港指定制度」とは、朝鮮総督府令によって制定されたもので、漁業及び海運業の奨励策としてつくられた制度である。その要件としては、①港が全国漁業の根拠地になり得ること、②地方の漁船の数が一定の数に達すること、であった。

*19 海を生活の場とする巨文島においては、金比羅羅が一年を通じて最も盛大に催された。航海安全の神様である“金比羅さん”は島の主祭神であり、入り江南端の小高い丘の上に位置していた。春(3月15日)と秋(10月10日)に行われる大祭では、青年団が神輿を担いで朝に神社を出発し、島中の全ての道(総延長1キロ弱)を何度も練り歩いた後、昼過ぎに海に突入した。神輿が突入すると同時に海へは紅白の餅が投げ込まれる。夕方には、神社に至る階段に露店が立ち並び、境内では各商店のくじ引きが行われていた。

*20 伝馬というのは、運送用の馬で、律令制では、駅馬とは別に、各郡に五匹ずつ飼わせ、公用旅行の官人に使わせた。戦国時代以降は宿駅に備えて幕府、領主の公用に供し、江戸時代には民間の輸送にも使った。(広辞苑、第4版)ここでは、水場で飲料水を汲み、運送する船を意味する。

*21 中村均、前掲書、p. 120～137

参考文献

- [1] 吉田敬市、朝鮮水産発達史、朝水会、1954
- [2] 孫禎睦、日帝強占期都市化過程研究、一誌社(韓国)、1996
- [3] 敦永甫、巨文島風雲史、三和文化社(韓国)、1986
- [4] 崔吉成、日本植民地と文化変容―韓国・巨文島、御茶の水書房、1994
- [5] 中村均、韓国巨文島につばん村―海に浮かぶ共生の風景、中公新書、1994
- [6] 三山面誌発行委員会、三山面誌、三山面(韓国)、2001
- [7] 朝鮮総督府、朝鮮の聚落(前・中・後編)、朝鮮総督府、1933
- [8] 布野修司、インドネシアにおける居住環境の変容とその整備手法に関する研究―ハウジング・システムに関する方法論的考察、東京大、博論、1987
- [9] 金泰永、開港場外人館研究、ソウル大(韓国)、博論、1991
- [10] 韓三建・布野修司、日本植民統治期における韓国蔚山・昌城地区の土地所有の変化に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第520号、pp.219～226、1999.6.
- [11] 飯塚キヨ、植民都市の空間形成、大明党、1984
- [12] 権赫在、韓国地理、法文社(韓国)、1999
- [13] 鹿持雅澄、万葉集古義、国書刊行会、1912-1914

(2003年 7 月10日原稿受理、2003年11月25日採用決定)